



Title	Margaret Atwood の「歴史」意識 : 時間と信頼
Author(s)	松浦, 菜摘
Citation	Osaka Literary Review. 2024, 62, p. 17-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94930
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Margaret Atwood の「歴史」意識

—時間と信頼—

松浦 菜摘

1. はじめに

Margaret Atwood は、カナダ出身のいわゆるポストモダン作家に位置付けられる作家である。彼女の創作活動は多岐にわたり、小説だけでなく詩、エッセイ、絵にまで及ぶ。フェミニズム作家と呼ばれることの多い Atwood だが、彼女の作品は単に女性性のみにフォーカスを当てているのではなく、他にも多くの Atwood の物語世界を結びつける内容・形式両面にわたる諸要素を兼ね備えている。その要素のひとつが歴史性である。それは物語内のキャラクターが経験した個人的歴史であり、またそれを内包する人類全体を取り巻く歴史、あるいはそれを超越した神話・宗教的な歴史によって形作られている。本稿では、数多の作品の中から彼女の代表作と評される『侍女の物語』(*The Handmaid's Tale*, 1985) を選び、その歴史性を拾い上げる。そして、この続編の『誓願』(*The Testaments*, 2019) も含めて、これらを「歴史小説」と呼ぶことができるのかについて考察を加える。それは Sir Walter Scott などに代表される、従来の歴史小説を継承するものといえるのか、あるいは新たな歴史小説の形を実現しているのが焦点となる。後述するが、Hutcheon の歴史記述的メタフィクション (historiographic metafiction) の概念を参照して述べる。

そもそも、小説における歴史性とは何であるか。一般にイメージされるそれは、実際に過去に起こった出来事や人物について、ある程度の時間的幅をもって描くその語りの叙事性であろう。しかし、この説明を定義とするには留意が必要である。なぜならば、前提として、Atwood の生きる

20 世紀のいわゆるポストモダンの時代においては、様々な事柄に関して従来の価値観が崩壊し、それに代わる新たな可能性を模索する必要があったからである。そのひとつとして、客観的に真実を表象することは不可能であるという一種の諦念のような感覚が作家たちに共有されている。“it is a ‘realism’ which is meant to derive from the shock of grasping that confinement, and of slowly becoming aware of a new and original historical situation.” (Jameson 71) という Jameson の記述からは、直接経験されていない過去は、継承された記憶の共有によってしか知り得ないという消極的な態度がうかがえる。このように、あくまで真実に辿り着けないという態度がポストモダニズム文学の前提として存在するのである。この歴史認識に則れば、先ほどの歴史小説の一般イメージはその存在の前提が崩されることになる。

ここで、Hutcheon による歴史記述的メタフィクションの概念を参照して考えてみる。Hutcheon はこの概念に関して “As in historiographic metafiction, the lesson [in a semiotics of history] is that the past once existed, but that our historical knowledge of it is semiotically transmitted.” (Hutcheon 122) と述べている。歴史家であり文芸批評家でもある White の、「出来事」(events、それ自体は意味を持たない)と「事実」(facts、意味を持っている)の峻別¹を踏まえた上で、歴史記述的メタフィクションでは過去に関する歴史的な知識は意味論的に伝達されとしたのである。「事実」とは、歴史の中の観客であると同時に為手である我々が、過去の史料の権威や客観性を強調したり失わせたりして作るものであるということである。このように歴史記述的メタフィクションは、真実の表象不可能性を前にして、現在の文脈や視点を意識することで過去を再構築することに新たな可能性を見出している。前述した Jameson には過去の真実に辿り着くことができないという否定的立場が一貫しているが、Hutcheon もその諦念をもった上で、過去を再生産することに着目し

ている。ここには、Jameson の歴史観にはない前向きな態度が表れているとあってよいだろう。

これまで『侍女』とその続編『誓願』はもっぱらフェミニズム SF (speculative fiction) と呼ばれてきた。それはディストピア社会を舞台に女性の抑圧を一人称体で描いているからであり、Atwood 自身が “I wanted to try a dystopia from the female point of view—the world according to Julia, as it were.” (Atwood, *In Other Worlds* 146) と述べていることから読み取れる、妥当な呼称である。次章の冒頭でも述べるように、『侍女』は、George Orwell の『1984 年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1949) がベースとなっており、この引用文中に登場する Julia はその中の登場人物である。そして時としてグロテスクなまでの過激さをもってその架空世界が描かれているために SF と呼ばれるのだが、Atwood 本人はあくまで空想や非現実ではなく、実際に起こったことやこれから起こり得ることを書いているのだと言う。以下は、1986 年に New York Times に掲載された Atwood のインタビューからの引用である。

“You could say it's a response to 'it can't happen here.' When they say 'it can't happen here,' what they usually mean is Iran can't happen here, Czechoslovakia can't happen here. And they're right, because this isn't there. But what could happen here? It wouldn't be some people saying, 'Hi, folks, we're Communists and we're going to be your new Government.' But if you were going to do it, what would you do?” (Rothstein 1986)

過去に「ここではないどこか」で起こったことを踏まえ、未来に「ここ」でそれが起こるとしたらと想定して『侍女』と『誓願』は編まれている。それは上述したような個人／人類史的過去に加え、未来も包含した

Atwood らしい大胆な「歴史」展開である。以上を踏まえ、ポストモダン作家 Atwood の歴史意識を論じる。

2. 時間意識

『侍女』は、Orwell による『1984 年』を下敷きとしている²。Atwood が『1984 年』を模倣しているのは内容のみではない。全体を二部に分け、前半の一人称語りを後半部分で相対化している構成も共通している。Thomas Pynchon は『1984 年』の後半部分（作品内で用いられる言語、Newspeak についての解説附録という体裁をとっている）について、それが一貫して過去形で書かれていることなどに注目した。そしてこれにより、匿名の筆者が作中の未来において、前半部分で描かれた社会を批判しているものであるという可能性を提示した。Atwood は Pynchon のこの指摘を踏まえて『侍女』の後半部分を書いている³。Historical Notes と題されたそれは前半部分より約 150 年後の歴史学会のシンポジウムを舞台として、前半の一人称語りが実は録音された音声史料であったと読者に悟らせるものになっている。講演を行う学者は次のように述べている。

“This item — I hesitate to use the word *document* — was unearthed on the site of what was once the city of Bangor, in what, at that time prior to the inception of the Gileadean regime, would have been the state of Maine.” (Atwood, *Handmaid* 301)

ここで語り手が録音した音声がどのように発見されたか説明している。このように、時間的な隔たりがあることで『1984 年』および『侍女』には分化された構成が内包されている。続いて『誓願』では、『侍女』において語り手であった女性の娘が主人公の一人となっている点から、この『侍女』『誓願』間にも 30～40 年程度の時間的隔たりがあることがうかが

える。また、『誓願』でも同様に構成は二分化されており、後者はシンポジウムの議事録となっている。『侍女』と『誓願』の物語内世界の時間的流れを直線で図示すると以下のように表すことができる。



- a : 『侍女』において主人公が語っている時期、前半
- b : 『誓願』にて3人の語り手（うち一人が『侍女』の語り手の娘）がそれぞれの語りを展開している時期、前半
- c : 現在我々が読者となる地点
- a' : 『侍女』の後半部分で描かれる第12回シンポジウム開催時期（2195年6月25日）、後半
- b' : 『誓願』の後半部分で描かれる第13回シンポジウム開催時期（2197年6月29日、30日）、後半

『侍女』も『誓願』も後半部分においては、『1984年』とは異なりシンポジウムという特定の間が用意されている。これは議事録の体裁で表されているため、書籍上では演劇台本のようにほとんど話し手と壇上のスピーチの内容が示されているのみである。これによって、まさしく客席から舞台を観るように、読者が観客となるのである。そしてここでは、笑い声や拍手などの他の聴衆の反応も示されている。そのような学会らしからぬフランクさをもって、読者はいきなり座らされた客席で聴衆の一部となることを感じさせられることとなる。前半では一人称現在形の語り、後半ではこのような仕掛けから、読者は書かれた全ての時代であたかも自分がその場を経験しているように感じるのである。さらに、このシンポジウムは23世紀に入ろうかという遠い未来の時点に設定されている。このように、描かれる場面には断絶した時間的隔たりがあるのだが、それゆえ読者はこ

れを読んで主体的に自らの視線から歴史の直線的流れを作ろうとする。断片をつなぎ合わせてひとつの秩序だった流れを浮かび上がらせようとするのである。

さらに、物語の外にも時間的な距離は広がっている。第1章で引用したように、『侍女』で描かれている政治的な出来事は、実際に我々の過去にあった歴史的事象がもとになっているのである。具体的には宗教原理主義者によるテロや、フェミニズム運動の高まりとそのバックラッシュなどにくわえ、着用が強制される中世的な服装に至るまで、人類史の様々な局面に言及されている。このように Atwood は、作品の中で断片的言及を繰り返すことで連続しない時間的隔たりを作り、目撃させることでそれらをまとめ上げる役割を読者に委ねているといえる。

3. 語りの信頼

前章で説明したように、『侍女』の前半の一人称語りは実はカセットテープに吹き込まれた音声である。抑圧された社会で縛るように一人語る主人公が、その中で聞き手の存在を想定したような話し方を展開する部分がある。前半部分で描かれる世界では基本的に文字の使用が禁止されていることもあり、その語りの信憑性は怪しくもあるが、そこで一人称単数形の“I”が次第に複数の“we”に変化していく様は明らかに人と人とを結びつける連帯意識を感じさせる。そうして語り手はテープを発見する未来の誰かに希望を託すのだが、実際に未来のシンポジウムでは変わらず女性蔑視発言を受けることになる。ここでもなお、あくまで史料としての重要性が説かれるのみで、語り手の主体性は蔑ろにされたままなのである。つまり語り手が想定した聞き手はそこには存在しなかったということになる。続く『誓願』でも、同様に語り手が読者に語りかける部分がある。それは手稿の体をとっているため音声ではないののだが、やはり後世に発見されることを想定した書きぶりである。この “I hover behind you, peering

over your shoulder: your muse, your unseen inspiration, urging you on.” (Atwood, *Testaments* 403) のセリフからは、コラボレーションという語り手と読者の共同的な関係が見えるのである。

Nevertheless it hurts me to tell it over, over again. Once was enough: wasn't once enough for me at the time? But I keep on going with this sad and hungry and sordid, this limping and mutilated story, because after all I want you to hear it, as I will hear yours too if I ever get the chance, if I meet you or if you escape, in the future or in heaven or in prison or underground, some other place. What they have in common is that they're not here. By telling you anything at all I'm at least believing in you, I believe you're there, I believe you into being. Because I'm telling you this story I will your existence. I tell, therefore you are. (Atwood, *Handmaid* 267-268 下線は引用者による)

さらに、この部分からは「語り合うことでお互いの存在を可能にする」という相互的な信頼関係もうかがえる。語り手と読者の関係性について、特に『侍女』においてはシンポジウムの中でそのコミュニケーションが失敗しているため、読者はより強く連帯感を感じるであろう。前章では、隔絶された様々な時代を目撃者となることで読者が「歴史」を作り上げる役割を担っていると述べた。しかし、最終的にはそのような「歴史」を可能にするのは、この語り手の読者への語りかけにあるともいえる。語り手が話した／書いたことは読者に主体性を求めることであり、読者がそれに応えることで初めて「歴史」が成り立つからである。

以下は、均一で直線的な時間の流れを無視していたり、「空白」の存在について『侍女』の語り手が言及していたりする部分の引用である。

I lie, then, inside the room, under the plaster eye in the ceiling, behind the white curtains, between the sheets, neatly as they, and step sideways out of my own time. Out of time. Though this is time, nor am I out of it. (Atwood, *Handmaid* 37 下線は引用者による)

まず時間を逸脱することに触れられている。これは、時間から疎外されることなく、直線的な時間という概念を無視して自分の意思でその外側へ飛び出すということである。

So. More waiting. Lady in waiting: that's what they used to call those stores where you could buy maternity clothes. Woman in waiting sounds more like someone in a train station. Waiting is also a place: it is wherever you wait. For me it's this room. I am a blank, here, between parentheses. Between other people. (Atwood, *Handmaid* 227-228 下線は引用者による)

続いて、ここでは語り手の、自身が空白であるという自意識がうかがえる。

Now there's a space to be filled, in the too-warm air of my room, and a time also; a space-time, between here and now and there and then, punctuated by dinner. The arrival of the tray, carried up the stairs as if for an invalid. An invalid, one who has been invalidated. No valid passport. No exit. (Atwood, *Handmaid* 224 下線は引用者による)

さらに埋められるべきものについて述べられ、それが現在と過去（ある

いは未来)の間に存在する時間と空間であると説明される。そして、先ほどと打って変わって、身動きが取れない状況が示される。時間を逸脱することと逸脱できないこと、つまり語り手は埋められるべき空白の存在というふうにより自身を知覚しているにもかかわらず、それが最終的には自分ではどうしようもないとここで半ば嘆いているのである。これら以外にも、語り手はそのような空白の存在について作中で何度も触れている。それを埋めることは読者が介入することで可能になり、語り手と読者が呼応することで実現するものである。そのやりとりで作られる線的なつながりが「出来事」を「事実」たらしめるのである。それは公的資料よりも個人の語りを優先する、信頼によって成り立った新しい「歴史」形成の過程である。

4. おわりに

『侍女の物語』と『誓願』における Atwood の時間意識および読者との信頼関係について見てきた。一見すると信頼できない語り手とするに相応しい主人公であるが、語りかけによって読者はその主人公と対峙せざるを得なくなる。彼女たちと対話し、信頼関係を築き、「事実」を共有してともに同じ視点から過去を見ることで、読者は歴史構築の共犯者となるのである。そもそも歴史構築は時間的な幅が存在することによって初めて成り立つ。そこで時間を巡る相互的な歴史認識の獲得のために、語り手に導かれ読者は主体的に過去への眼差しを構築していくこととなる。Atwood はその場をテキスト中に用意することで、語り手と読者の交流を生み出そうとしている。

よって『侍女の物語』と『誓願』は実際の歴史的題材を扱った歴史小説ということもできるが、読者を歴史構築のプロセスに巻き込む能動的な装置を内包した物語であるともいえよう。それは共感を契機とした装置であり、さらに過去のみならず未来にまで及ぶ視線を生み出している。換言すれば、この感情による新しい可能性の創出プロセスは、歴史記述的メタ

フィクションが目指す方向のひとつが実現された結果である。そして、Atwood 文学俯瞰して見たときに、この論が全体に適用可能であるかどうかは今後の研究課題としたい。

注

¹ この両者の違いは、White が「事実は与えられるものではなく、出来事に対してどのような問いを立てるかによって構築されるのである」(White 43) と説明したとおりである。

² Atwood はまた “Orwell became a direct model for me much later in my life—in the real 1984, the year in which I began writing a somewhat different dystopia, *The Handmaid’s Tale*.” (Atwood, *In Other Worlds* 146) と述べている。

³ またここでも同箇所にて、“However, the essay on Newspeak is written in standard English, in the third person, and in the past tense, which can only mean that the regime has fallen, and that language and individuality have survived. For whoever has written the essay on Newspeak, the world of Nineteen Eighty-Four is over. Thus it’s my view that Orwell had much more faith in the resilience of the human spirit than he’s usually been given credit for.” (Atwood, *In Other Worlds* 145-146) と述べている。

引用文献

- Atwood, Margaret. *The Handmaid’s Tale*. Houghton Mifflin Harcourt, 1986.
- . *The Testaments*. McClelland & Stewart, 2019.
- . *In Other Worlds: SF and the Human Imagination*. Virago, 2011.
- Hutcheon, Linda. *A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction*. Routledge, 1988.
- Jameson, Fredric. *Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. Duke UP, 1991.
- Orwell, George. 1984. Secker & Warburg, 1949.
- Rothstein, Mervyn. “No Balm in Gilead for Margaret Atwood.” *The New York Times*, 17 Feb. 1986.
- White, Hayden. *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism*. Johns Hopkins UP, 1978.